

(熊本県立芦北) 学校 令和4年度(2022年度)学校評価表

1 学校教育目標

【教育目標】

「私は挑戦する、夢を実現するために」

【目指す生徒像】

- ・夢に向かって努力し、協働する生徒
- ・自分と他人を認め、人の心の痛みがわかる生徒
- ・課題を発見し、解決するために行動する生徒

【教師の目標】

- ア 生徒一人ひとりを理解し、個性を見つけ、伸ばす教育を実践する。
- イ 学習の基礎基本を大切にし、発展させることで生徒をワクワクさせる。
- ウ 生徒・保護者・地域の期待を理解し、連携して目指す生徒像の実現に努める。

2 本年度の重点目標

【重点目標】

- ア すべての教育活動における「魅力ある人材の育成」の具現化
- イ すべての校務における課題解決の推進
- ウ より効率的・効果的な教育活動・校務(事務)対応の推進
- エ 豪雨災害からの復興による教育環境の充実と活用
- オ 100年の歴史に学び、これからの100年を築く

【教育方針】

- ア 地域に学び、学びを地域に返す、地域に開かれた学校づくりを推進する。
- イ 1人1台端末及びICTを活用した教育活動を推進し、より効果的な学習指導を実践する。
- ウ 目標を高く持ち、チャレンジ精神旺盛な人材を育成する。
- エ 生徒自身による主体的、創造的な学習活動、特別活動を推進する。
- オ 部活動を推進し、生徒の心身の鍛練と活気溢れる学校生活を実現する。
- カ 図書館活用と読書による、読む力、考える力、表現する力を育成する。
- キ 基本的生活習慣が確立できるよう、生徒を支援する。
- ク 生活指導と教育相談が協働し、安心して過ごせる学校づくりを推進する。
- ケ 自己肯定感及び他者の個性を理解する心を醸成する。
- コ 自然との触れ合いや地域との交流から、自然と郷土を愛し、大切にすることを育成する。
- サ 各教科の学びや国際交流活動において、SDGsへの取組を推進する。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	令和4年度の入学者(3学科)65名を超える令和4年度入学を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦高教育の魅力を地域へ発信し、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。ICT端末を活用した学校PR動画(YouTube)の制作と配信。	B	各科の特色を活かして、中学校や地域と連携を図り、SNSなどを活用し本校の魅力を発信することができた。学校PR動画の更新を現在進行中で今後、配信する。
	業務改善	校務における課題解決の推進	各校務分掌の最低1つは課題に取組みチームで協働して問題解決を進める分掌組織。	年間反省をもとに校務分掌で課題解決の取組みを具現化する。町の支援事業を活用したレベルアップ事業と学科の専門性を活かした地域との連携	B	体育大会、文化祭等の時間短縮や行事を精選したことで、より効率的・効果的な学校経営に繋がった。町の支援事業を活用し、生徒のレベル

			学校行事の見直しと業務の効率化。	を深める。学年・学科、分掌における個々の経営感覚を高める。 新しい生活様式をふまえた行事の工夫と延期・中止の場合の代替案の作成		アップを実現し生徒の進路実現に繋げることができた。中学校での出前授業、小学校との交流学習、VR模擬体験授業など各科の特色を活かした取り組み等により、個々の経営感覚が高まった。
	働き方改革	時間内での効率的・効果的な校務処理の推進	業務超過時間昨年比10%減を目指す。1日10分の実勤務時間の短縮と情報伝達システムの有効活用。	職員朝会週1回の実施。定例の職員会議の廃止。ICTを活用して会議時間を短縮。	B	職員会議・朝会については、実施回数の削減ができた。一方で、現在業務超過時間昨年比は10%増であり、今後、更なる改善を推進していく。
	危機管理	豪雨災害の復旧と教育環境整備 不祥事根絶の徹底	不測の事態に対応できる機動性の高い学校組織の再編。 不祥事ゼロを目指すし、地域から信頼される学校づくりを目指す。	自然災害等における防災行動の確認と避難訓練の実施。月に2回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で確認し、不祥事根絶の意識を高める。短期集中型の効果的な職員研修を実施する。	A	改善点はいくつかあったが、避難訓練が適正に行われ、学校全体で防災行動の確認ができた。職員朝会で毎月2回、不祥事防止の確認事項を確認するとともに不祥事防止の研修も効果的に実施することができた。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年1回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。 授業におけるChromebookの活用を積極的に行う。	各教科で主体的対話的で深い学びを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。 Chromebookを活用した学習保障を行う。 (1人1台端末先行実践校)	B	全教科において教育課程研究協議会(オンライン)に参加し、新学習指導要領及び授業改善、評価等に関する研修を受けた。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導をすることができた。授業でChromebookを活用した共同学習やChromebookの毎日の持ち帰りで学習保障ができた。
	授業力向上のための取り組み	授業の充実	公開授業週間を年2回、授業研究会を各グループ年1回実施する。 各教室に設置している電子黒板機能付プロジェクタを有効活用する。	研究授業では、同一学科を対象に専門学科と普通教科で連携して実施し教科横断的な視点に立った取り組みを行う。電子黒板機能付きプロジェクタ・Chromebook等のICTを活用した授業を展開する。	A	校内での公開授業週間を年2回実施し、指導力の研鑽ができた。芦北町の総合的な支援で導入した各教室の電子黒板と書画カメラを授業で積極的に活用できた。 1人1台端末先行実践校として3教科でChromebook等のICTを活用した授業を公開し、2教科の研究授業を実施した。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間10冊以上の読書量の確保を目指す。 毎月1回、漢字テストを実施す	朝の10分間読書の充実を図る。 月1回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。 家庭学習時間確保	B	考查期間中は朝学習として、それ以外は朝の10分間読書を実施し、朝読書が充実した。漢字テストは、学年が中心となり成果を上

			る。 生徒一人あたり1時間以上の家庭学習量を確保する。	のため課題を工夫する。 長期休業期間中、課題を出し学習させる。 町の支援事業で導入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。		げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは進学ゼミや公務員指導で積極的に活用されている。
キャリア教育 (進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報源となる校内用ポータルサイトの内容を拡充する。週に一回以上の更新を行う。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、必要な情報について拡充する。	A	「進路部便り」を動画で配信。学校や事業所からもPR動画の投稿を募って掲載するなど新規の取組を進めることができた。
		進路保障	2月末には、希望進路達成100%を目指す。全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	A	キャリアサポーターを中心に関係機関と連携し課題を持つ生徒にも丁寧に指導・支援を行うことができた。
	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に2つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	引き続きコロナの影響はあったが生徒の資格取得への意欲は高く、各学科・学年の強力の下昨年度以上の成果が得られた。
生徒指導	命や人権を尊重する豊かな心の育成	社会規範意識の醸成と安全安心な教育環境の整備	ルールや校則を守るための判断力と自立心の向上を目指す。 SNS等によるトラブルを防止する。 交通違反・交通事故0を目指す。 特別な指導件数5件未満を目指す。	分かる指導、丁寧な言葉による指導を徹底する。 関係機関と連携し、学びの機会を確保する。 情報モラル教育・交通安全教育等についての講演会等を計画する。 交通委員による二輪車施設呼びかけや登下校指導、バイク通学生集会を実施する。 地域や保護者、教育相談部、SCとの連携を密にし、問題解決を図る。	B	相手の立場に立った言動がうまくできない生徒が多くなり、生徒の規範意識の醸成や学校の雰囲気作りが非常に難しかった。それに伴い、SNSを通じた友人関係のトラブルも増えている。また、自転車による人身事故も起きた。薬物乱用防止・交通安全・情報モラル教育は計画どおり実施できたが、今一度検証していきたい。「特別な指導」は2件のみであった。
	自ら考え、学び、夢に向かって努力する主体的な態度の育成	基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の向上	夢に向かって努力する生徒、さわやかな挨拶ができる生徒、人の心の痛みがわかる生徒の育成を目指す。	生徒会が主体となった行事運営や委員会活動の活性化を図る。 学級担任を中心とした、生徒の個性と長所を伸ばす指導を行う。	B	芦高祭などの学校行事では生徒会が主体となって活動し、全校生徒が準備段階から楽しそうに取り組んだ。2学期からは生徒会が毎朝校門周辺の清掃活動に取り組んでいる。また、各委員会がそれぞれ積極的に活動しており、生徒の一生懸命さに感心する。 先生方の丁寧なコミュニケーションや指導のおかげで、生徒は落ち着いている。一方で、部活動で学んでいるこ

						とを学校生活の場面で生かし切れていない生徒も多く、うまくリンクできるともっと学校が活性化するのではないかと期待している。今後も職員間のコミュニケーションを増やし、情報共有していく必要がある。
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ1回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。LHR等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	コロナの影響で校外研修の多くが中止となったが、開催された熊本県人権教育協議会やWeb研修には参加することができた。校内研修は2回実施することができた。各学年会において人権LHRの事前研修を行うことができた。
	すべての教育活動を通じた取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談部や生徒指導部と連携し、特別な支援を必要とする生徒、様々な課題を抱えた生徒の情報収集ができ、人権教育の視点に立ち支援について考えることができた。
	命を大切に する心を育む 指導の充実	命の大切さを 実感させる教育 の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。人権週間、人権集会を実施する。	B	人権集会で生徒指導部と連携し、交通被害者遺族の講演会を実施した。公的な相談窓口が掲載されたカードを複数枚配布した。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成を目指す。面談旬間を設け、全クラスで生徒面談を学期1回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にする心を育む。「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	A	12月に人権週間を設け、人権委員によるメッセージや「いじめを許さない宣言文」、人権にかかわる曲等の昼休み放送を行い、身近にある人権を考えさせるとともに、一人一人の行動に関して自覚を促した。
	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年3回実施して、いじめの実態を把握し、対策を早急にする。いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取り合い早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。(年3回のアンケート実施)いじめ防止等対策委員会を年3回実施し、外部専門家から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	B	各学期1回心のアンケートを実施し、いじめを早期発見することができた。いじめ防止対策委員会では、専門委員の先生から指導助言をいただき、いじめ防止、仲間づくり等への示唆をいただくことができた。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学期に1回行い、全職員の共	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を4月初旬までに把握する。「気づきメモ」週間、	B	新入生の実態把握に努め、年度初めに生徒理解研修を行い、職員間での共通理解を図った。新入生の支援対象生徒につい

			通理解を図る。保護者の理解を得て、支援を開始する。	教科担当者会をふまえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。		では、個別の教育支援計画・指導計画を作成し、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（3年生）の進路決定 100%を目指す。1・2年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	A	進路指導部と協力し、支援対象の3年生については、関係機関と連携を取りながら就職支援を行うことができた。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	教育相談部内で情報交換を行い、生徒の状況把握に努めた。スクールカウンセラーにはカウンセリングのほかに職員への助言、必要に応じて医療機関等と連携を図ってもらった。教育相談校内委員会を実施し、他部署との情報共有ができた。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を年間2回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、災害経験を活かした地域合同防災訓練への参加等の検討。また、町の方針に基づき、コロナ感染対策を考えた避難所運営について検討する。	B	小中高連携による学校支援活動の活性化に向けた意見を参考に、地域に学ぶ交流活動の実践を行うことができた。コロナ感染対策を考えた避難所運営は、他の感染症対策にも適用できるように応用していく。
		平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会時に、平常時における地域連携に関する具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙千屋地区住民の参加型交流活動の検討。	A	豪雨災害に伴う校舎の工事が終了し、避難所運営計画を以前の形に戻し周知を協議会で行った。今年もコロナ禍により地域合同防災訓練は実施できなかったが、学校単独の訓練（洪水・土砂、火災、地震・津波）を実施し、連携できる体制を整えることができた。
		芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分な効果が高まる活用を実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	A	総合支援事業を有効活用し、ICT特定推進校として実践的かつ専門的な学びの向上に繋げることができた。レベルアップ事業の活用は、生徒の進路実現に向けて大変効果的な取組となった。